

初代教会の礼拝の様子

A. 【初代教会の礼拝と聖餐のようす。】

初代教会では、聖餐は毎日行われていました。

- ・「家ごとに集まってパンを裂き」(使徒2:46)
- ・「彼らは使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」(使徒2:42)
- ・「週の初めの日、私たちがパンを裂くために集まっていると」(使徒20:7)

弟子たちは最初、土曜日(安息日)の神殿礼拝を続けていました。その様子は使徒言行録にのせられています。

- ・「毎日ひたすら心をつにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していた。」(使徒2:46)
- ・「ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った」(使徒3:1)

キリスト教徒たちは、最初はユダヤ教の一派(ナザレ派)であると思われていました。ところがイエスをメシアと告白する者をユダヤ人は会堂から追放するように決めたのです。「ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである。」(ヨハネ9:22)キリスト教徒たちは、会堂からも神殿からも追放され、信者だけの集会を日曜日に信者の家の教会(マルコの家、リィデアの家など)でもつようになります。日曜日はまだ休みではなかったので、日曜日(週の初めの日)の早朝、仕事に行く前に共に集まって祈り、食事をしました。再び夕方信者の家に集まって礼拝と聖餐(夕の食事の中でパン裂きをしていた)をしていたということが分かっています。彼らは土曜日(安息日)礼拝をやめ、日曜日を「真の安息日」、「主の復活の日(主の日)」として祝い始めたのです。

※土曜日の安息日は7日間の天地創造を記憶するが、日曜日の安息日は第八日目、天国の一日を記憶するのであって、質が違う。

そこでは最初、普通の食事(愛餐=アガペーと呼ばれる)の一部として「パン裂き」と呼ばれる聖餐が行われていましたが、やがて聖餐は愛餐から分離されるようになりました。それはコリント教会にあるような聖餐の問題が生じたからです。(1コリント11:17)

●当時の聖餐式は、愛餐式の中で行われていた。愛餐会は「アガペー」と呼ばれ、聖餐式は「ユーカリスティア」と呼ばれ、愛餐会は習慣になっていたようである。信者はそれぞれに食べ物を持ち寄り、分け合って食べていた。その持ち寄った物

の中からパンとワインを残しておいて、聖餐に用いたのである。しかし、コリント教会ではこの愛餐が悲しむべき方向に向かってしまっていた。教会の中には富める者も貧しい者もあり、食料をたくさん持ってくることのできる者も、何も持って来られない奴隷たちもいた。(今も一緒である) 奴隷にとっては愛餐会が本当に自由に食べられる食事の時であったかもしれない。コリント教会では、富める者が、貧しい者、奴隷、身分の低い者と共に食事をするのを嫌がり、金持ち同志で集まって先に食事をしていた。貧乏人は何も食べる物がなく、腹をすかせていた有様であった。「食事のとき各自が勝手に自分の分を食べてしまい、空腹の者がいりかと思えば、酔っている者もいるという始末だからです。…神の教会を見くびり、貧しい人々に恥をかかせようというのですか。」(21～22節) 聖餐式の前なのに、もう酔っ払っている者がいるという。これがコリント教会のあり様だった。無秩序そのものである。教会員の社会的格差をなくすはずの愛餐会が、逆にますますそれを悪化させてしまった。「あなたがたの集まりが、良い結果よりは、むしろ悪い結果を招いているからです。」(1コリント 11:17)

教会は当時、「奴隷と自由人、男と女、大人と子ども、ユダヤ人と異邦人など」といった「壁」を破壊して一つに集まった驚異的な共同体であった。これは画期的なことであり奇跡に近かった。その中でも聖餐式というのは一つになる具体的な式なのである。だから「パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です」(1コリント 10:17)という言葉を読んだのだ。この一体が損なわれるようなものは聖餐の目的を果たしていないのである。

その一つが仲間割れ、分派である。「あなたがたが教会で集まる際、お互いの間に仲間割れがあると聞いています。…それでは一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにならないのです。」(1コリント 11:18、20) 金持ちたちは、奴隷や貧しい者や病人、障害者と共に一つの杯から飲むことを嫌がった。そこでプロテスタント教会はオチョコを開発したのである。これは差別の産物であって良くない。一つの杯から飲むべきである。

そこで、キリスト教徒特有の「パン裂き」を中心とする礼拝が生まれてきます。信者たちは、それぞれ家から持ち寄った、捧げ物、奉納物、収穫物を神に捧げていました。その中から「パンとぶどう酒と水」が分けられ、祈りが捧げられ、聖別されて、信者たちに与えられました。このパンとぶどう酒と水が献げられ、聖別され分配される儀式を、彼らは『パン裂き(エウカリスティア)』と呼んでいました。エウカリスティアに用いられなかったパンは、祝福されたパン(エウロギア・アンティドル)と呼んで、未信者にも与えられました。

迫害が始まって、結社禁止令が出された時、キリスト教会は愛餐会(アガペー)はめましたが、聖餐を止めることはありませんでした。聖餐については、異教徒たちの間では「キリスト教徒は子どもの肉を食い、血を飲んでいりかがわしい群れ」

という噂が飛びかいました。そこで、まだ本当に聖餐の意味を知らない求道者は一部の礼拝で帰らせ、二部から信者だけの「聖餐」を中心とした礼拝が行われるようになりました。一部の礼拝の事を《求道者の礼拝》と呼び、聖書・福音書の朗読と説教が中心でした。二部の礼拝の事を《信者の礼拝》と呼び、聖餐が中心でした。一部から二部に移行する時に、司祭は「啓蒙者（求道者）は出なさい」という呼びかけがなされました。ローマンカトリック教会で「ミサ」と呼ばれるのは、この時の司祭の言葉から来ています。《信者の聖体礼拝》は、秘密に行われました。また、信者になるには3年間の教育が必要とされました。殉教する覚悟がなければ信者にはなれないからです。彼らは命がけて聖餐を守りました。殉教者は、死ぬ前に必死に聖体を求めました。中途半端な信者では、捕まった時に仲間の居所をしゃべり、共同体全体が殉教しかねないからです。彼らは必死になって聖職者を逃がしました。書物は没収され、建物は破壊されましたが、教会は聖職者さえいたら再建できるからです。また聖職者はすぐに育たないからです。迫害が終わって、皇帝が聖職者を招いた時、五体満足な者はあまりいなかったといひます。

●【リタージという意味について】

英語で礼拝のことを「リタージ」といひます。ギリシャ語の「レイトゥルギア」から来ています。この言葉は「ラオス（人々、民、国民）」と「エルゴン（仕事、働き）」という言葉からなっています。「人々の果たす公共の仕事」「国民の公務」という意味です。ローマ帝国では、公共の土木工事で働くこと、税金を支払うこと、兵役の義務もこの言葉で表現されました。初代教会は、この「レイトゥルギア＝リタージ」という言葉を、礼拝用語に使いました。（使徒 13：2、ヘブライ 9：21、10：11）

①礼拝とは、参加者である神の民全員によって形作られる共同作業です。「リタージカルな礼拝」という言葉を聞くと、「儀式的な礼拝」という意味で捉えている人がいますが、そうではありません。「リタージカルな礼拝」とは「礼拝参加者全員が共に礼拝を守るために、各人がそれぞれの役割を積極的に果たしている状態のこと」をいっています。特定の牧師や、一部の信徒だけが礼拝を奉仕し、その責任を担い、それ以外の人々が「お客さん」のような状態に置かれている礼拝は、本来の礼拝の姿ではないということです。会衆全員が、自分も礼拝に参加したという実感がもてるような礼拝、自分も声を出して朗読し、歌い、祈り、奉仕をし、動作をする礼拝のことです。

②礼拝とは、単なるプライベートな事柄ではなく、キリスト者にとっての「公の仕事」です。「リタージカルな礼拝」とは「公の礼拝」であって、キリスト者にとっては何ものに勝って守るべき「公務」であることを意味しています。神の国の市民＝キリスト者にとって礼拝を守ることは公務です。

B. 【当時の礼拝の様子が乗っている資料】

①. 『十二使徒の教訓（ディダケー）』（1世紀末）

「流れる水によって、父と子と聖霊の名をもって洗礼を授けなさい。流れる水がない場合には、他の水で洗礼を授けなさい。冷たい水でできない場合には、温水でしなさい。どちらの水もない場合には、頭に水を三度、父と子と聖霊の名をもって注ぎなさい。洗礼の前には、授洗者、受洗者、また他に誰か可能な人達がいるならば断食をしなさい」

「主が福音書でお命じになったように祈りなさい。…毎日3回、このように祈りなさい。（主の祈りについて）」

「主の名をもって洗礼を授けられた人達以外は、誰もあなたがたの聖餐から食べたり飲んだりしてはならない」

「主の日ごとに集まって、あなたがたの供え物が清くあるように、まずあなたがたの罪過を告白した上で、パンを裂き、感謝を献げなさい」

「聖なる父よ。あなたが私たちの心の中に住まわせられたあなたの聖なる名と、あなたの僕イエスを通して私たちに明らかにされた知識と信仰と不死とについて、あなたに感謝します。あなたに栄光が永遠にありますように。全能の主よ、あなたは御名のゆえに万物を創造されました。また人々があなたに感謝を捧げるように、彼らに飲食のために食物と飲み物とを与えられました。他方、私たちに、霊的な食物と飲み物と永遠の生命とを、あなたの僕イエスを通して賜りました。あらゆることに先立って、私たちはあなたが力強い方であることを感謝します。あなたに栄光がありますように。主よ、あなたの教会を覚えそれをすべての悪から解放し、あなたの愛によって完全なものとしてください。それを聖めて、四方からあなたがそのために準備されたあなたの国へと導き集めてください。力と栄えとは永遠にあなたのものだからです。恵みが来ますように。この世が過ぎ去りますように。ダビデの子にホザナ。聖なる人は来るように。聖でない人は悔い改めなさい。マラナ・タ、アーメン。」

②. 『バルナバの手紙』（80～140年）

「その日には、私（神）はすべてを休み、第八日目のはじめ、つまり別の世界のはじめを作ると言うておられるのである。それゆえに、私たちも、イエスが死人の中から復活し、人々に現れて、天に昇った第八日を祝うのである。」

③. 『イグナティオスの手紙』（110年）

「だから神に感謝し（聖餐を行い）、神に栄光を帰するために、もっと頻繁に集まるように努めなさい。なぜならあなたがしばしば集まるなら、サタン力は破られ、サタンの災いはあなた方の信仰の一致によって失せるのです。」「あなたがたが集まるのは、あなたがたが心を乱さず監督（主教）と長老団（司祭）に従うため、そこであなたがたは一つのパンを裂くのですが、これは不死の薬、死ぬ

ことなくイエス・キリストにあつて常に生きるための死に対する解毒剤なのです。」

「分裂に陥らず、ただ一つの聖餐に与るように努めなさい。なぜなら、私たちの主イエス・キリストの肉は一つ、彼の血と合一するための杯は一つ、祭壇は一つ、ちょうど長老団と、私の仲間である執事たちと結ばれている監督はただ一人なのと同様です。」

④. 『プリニウスとトラヤヌスの往復書簡』 (110～112年)

「彼らは定められた日の夜明け前に集合し、キリストに対し、あたかも神に対するように、こもごも歌を唱い、また何か犯罪をしようという誓いではなく、決して盗みをしない事、強盗や姦通をしないこと、信義を破らない事、預かった物を、求められた時には拒まない事、などを誓う誓約をするのを常とした、というのであります。そしてこれらの行事をすませると一旦散会し、その後再び食事をするために集まるのが習慣だったというのですが、その食事はごく普通の害のないものであったと申します。しかもこの食事さえ、私が陛下の指令に基づいて、結社を禁止した告示を発しました後は、行ふのをやめた…」

⑤. 『ユスティノスの護教論』 (150年)

「この食物は、われわれの間では聖体と呼ばれ、われわれの教えが真理であることを信じ、罪の赦しと再生の洗いによって洗われ、キリストが教示されたように生きる者でなければ、誰もこれに与ることは許されない。われわれはこれを普通の食物、普通の飲み物として受けるのではなく、神の言によるものとして受けるのである。救い主イエス・キリストがわれわれの救いのために血肉を取られたように、主から受けた言の祈りによって祝福された食物、それによってわれわれの血と肉が養われるこの食物も、それが変化することによって、肉体となられたイエスの血と肉なのである、とわれわれは教えられている。使徒たちは福音書と呼ばれる彼らの書いた回想録の中で、次のように語っている。…

日曜と呼ばれる日には、町や郡に住むすべての人々の集会があり、そこでは時間の許すかぎり、使徒の回想録や預言者の書いたものが読まれる。そして朗読者がやめると、司式者が語り、これらの立派な模範に倣うようにとわれわれを戒め、かつ勧める。その後でわれわれは一斉に立ち上がって祈りを献げ、前に述べたように、祈りが終わるとパンと水とぶどう酒が持ってこられ、司式者が同じように立ち上がって力を込めて祈り、感謝を献げ、一同は「アーメン」をもって同意を表わす。それから聖餐の食物が分けられ、一同がそれに与り、欠席者には執事の手で届けられる。豊かであり、かつそうしたいと望む人達は各自の思い通りに捧げ物をする。集められたものは司式者に託され、彼はみなし子、やもめ、また、病やその他の理由で困っている人々に援助を与える。獄にある者、外国からの旅人、すべて必要を持つ人々にとって、彼は保護者なのである。われわれは太陽の日に一般の集会を開くが、これはその日が、神が暗闇と混沌とした状態を取り去

って、世界を造られた第一の日でありまた、われわれの救い主イエス・キリストが死人の中からよみがえられた日だからである。」

⑥ 『テルトゥリアヌスの護教論』(197年)

「われわれの会食はその名称から何であるかがわかる。ギリシャ人の間ではそれは『愛(アガペー)』と呼ばれている。会食の際の収入はすべて神と人に仕えるために使われる。…われわれはまず神への祈りをした後でなければ席に着かない。…話をする際にも、その場で神も聞いていると思って話すのである。手を洗う水が出て、明かりがつくと各人は皆の前に出て、それぞれ聖書や、あるいは自分の胸の中から出てくる思いを、皆の中に立って神に向かって歌うように言われる。…その会食は宴会というより修養会といった方がいい。」